

狸 2 狸の死真似 = = = 猪・鹿・狸より

よく言う狸寝入りは、ほんとうの狸にはまだ聞いたことがなかった。しかし死真似をする話の方は、狩人に聞いても確かにあると言うておる。早い話が山で狸を追いかけて、どんと一発喰らわした時、ころりと見事にひっくり返った時などは、なかなか油断が出来ぬそうである。猟犬に追いかけられた時でも、犬が追いついて一噛み当てたと思うと、もうぐたりと参ることがある。そんな時に限って隙を窺っているのに、犬でもうっかり遁がすことがあると言う。しかし老巧な犬は、やはりそれをよく知っていて、決して油断をしないとも言うた。



鳳来寺村峯の、音なんとか〔音吉〕という狩人だと聞いた。ある時分垂（ぶんだれ）の山から追い出した狸を、田の中へ追い込んで、猟犬を向けると、すぐ啜えて来たそうである。その狸を家へ持って来て、土間へ転がしておくに、犬が傍らに坐って番をしていたそうである。すると、その時

ちよつとの間背戸へ用足しに出て帰って見ると、犬が門口で狸と噛み合っている。見る見る犬が啜えて振り殺してしまったそうであるが、もしもその時犬がいなかったら、遁がしてしまったらうと言う。

また同じ村のある男は、撃ってきた狸を土間において、炉辺に坐って飯を食っていた。すると戸の外に繫いである犬がしきりに吠え立てるので、格子の間から覗いて見ると、死んでいたはずの狸が、そっと頭を持ち上げている。こいつ嘘死だなと思って、えへんと一つ咳払いをすると、慌ててまたぞろぐったりしてしまう。そして暫く経って四辺がまた少し静かになると、狸がそっと細目を開けて様子を窺っている。えへんとまた一つやると、慌てて眼を閉いってしまったと言う。

また滝川の某の狩人は、椎平の山で、狸が山のタワを遁げるところを撃つと、飛び上がってころりと転がったそうである。それを家に持って帰って、半日ほど土間の天井に吊るしておいてから、下ろして皮を剥ぎに。するとその狸が、

背中を半分剥がれたままで、のそのそ這って背戸口から外へ逃げ出した。そこへ折りよく家内のものが来て、大騒ぎをやって、捉えたことがあったと言う。

鼠などにはよくあった。長押の上を走るところを、箒で払うと、ばたり落ちて来る。尻尾の先を掴み上げて、表の端まで持ち出して、そこにおくかおかぬ間に、ちよろちよろと遁げてしまった。これなど一時気絶していたと言え言えるが、背中を半分剥がれてから、初めて正気づいたとしては変なわけだ。そう言って、それまで死に真似していたとすると、えらい辛抱強いことである。

しかし何れにしても、如何にも狸らしいやり方ではあった。